

弥生散策 | キャンパスを歩き、街を訪ねる。

渡辺知明さんと7号館A棟屋上のバイオトロンを訪ね、食糧化学研究室の戸塚護准教授と根津の串揚げ屋を覗く。



バイオトロンを保守管理する渡辺知明技術専門職員

熱帯気候の管理人

ダウンジャケットを着たまふ扉を開けると、そこは熱帯だった。ガラス越しに12月の陽が沈む。

ここは7号館A棟の屋上にあるバイオトロン。日本語では「生物環境調節装備実験室」というらしい。温度、湿度、光などを調節し、植物の育成を観察する施設だ。

寒風に吹かれて入ってきたカメランは、むっとする空気にレンズの結露を恐れて退散した。

案内の渡辺知明さんに尋ねると、施設内は温度30度、湿度55%に保たれているという。天井にぶらさがったライトが、こちらの厚着を笑う。額には早くも汗が滲んできた。

東大農学部にて初代バイオ

ロンが設置されたのは昭和32年のこと。いま生命科学総合研究棟があるところに平屋の施設が建っていた。渡辺さんが技術職員として勤めはじめた20年前、この装置はまだ稼働しており、先輩職員とメンテナンスにあたった。「古い機械だったのでよく故障しました。それを修理したり、油をさしたり、分解清掃したり」と渡辺さんは振り返る。生命科

学総合研究棟を建てるための老機械の引退が決まったときは、さすがに寂しかった。

弥生キャンパスにはいまバイオトロンが4箇所ある。1日24時間、年間365日稼働しているそれらの装置を管理しているのが渡辺さんだ。

出勤するとまず各所を回り、異常がないか確認する。風邪で休むわけにもいかず、けっこう大変な仕事だが、黙々と励む。

ひとつ文句があるとすれば、昔と比べて装置が進歩したことだ。「最新の制御装置は電子パーツが多いので、異常があっても業者に連絡するだけ。故障を直すわけにもいけません」と悔しがる。

こうした実験でどんな成果が得られるんですか、と尋ねると、すぐにたしなめられた。

「ここでやっているのは、基本的な実験の積み重ね。試行錯誤の連続で、すぐになにかの成果につながるものではありません」。つまり地道な基礎研究というわけだ。

その地道な研究を、下支えしている裏方の、さらに地道な姿勢に脱帽した。



Making sure the facility's atmosphere is kept at a right temperature and humidity.